

# ら は た

TAHARA  
History Inquiry  
Club

# 探訪

# 歴史

# クラブ

其の37

地域の文化を彩った画人たち

渡辺華山・小華の画風を受け継ぐ南画を盛り立てたのが、井上華陵（1862〜1930）、鍋木華国（1868〜1942）です。華陵は田原藩士の家に生まれ、田原町内



鍋木華国筆  
「花鳥画」(明治23年)

で教職につき、その後巴江神社の神職に就きました。また渥美郡内の養蚕業の普及にも力を注ぎました。華国も藩士の家に生まれ、華山会の設立や華山展の開催など、渡辺華山の顕彰に力を注ぎました。

共に美しい色彩の花鳥画を得意とし、田原画壇の隆盛に寄与した画家で、田原町を中心とする旧家にその作品が見られます。

加治町の黒田華川（1880〜1934）も華山・小華の画風を伝える南画を描いた作家です。このほかに、華山・小華の流れをくんだ画家がいたと思われませんが、詳細はわかりません。

これまでにご紹介した作家たちは、いわゆる趣味・教養としての活動で地域の文化発展に貢献した人々です。その一方、中央の画壇に果敢に挑戦した画家もいます。

鵜飼節夫（1902〜1983）

はその中の一人です。野

田町で生まれた彼は日本美術学校を卒業し、小茂田青樹、堅山南風に師事しました。昭和5年の日本美術院展の初入選以後、21回入選を果たしています。昭和24年には、地元野田町で展覧会を開催した記録があります。花鳥・風景を得意とした日本画家で、華やかな色使いの作品を残しています。地元を中心に数多くの作品が残ります。

赤羽根町の太田美山も、大正2年上京し、美人画を伊東深水に師事しました。美術名鑑には昭和26年から47年まで記載されていますので、評価は高かったと思われれます。赤羽根町にはその作品が見られます。

江戸時代までは美術という言葉もなく、展覧会というものもありませんでした。それが、明治時代以降に近代化が進む中で、欧米の展覧会というシステムを導入し、絵画制作が、それまでの個人の依頼によるものから、多数の人に展覧し評価を受ける、という方法に変わりました。



鵜飼節夫筆「風景画」(昭和時代)

作品も特別な展示空間（展覧会）にふさわしい大きさ、内容に変わっていきます。これらの転換期を境に、田原の画壇も絵画作品に接する機会が変化したように思います。

3回続けて日本画家をご紹介してきました。また、田原市には優秀な洋画家がいましたし、現在も活躍している画家がいます。別の機会にご紹介したいと思います。（増山）

生涯学習課 ☎ 23局3531